

インファンス、語る子どもの鏡像

—小林夏美『「語る子ども」としてのヤングアダルト』とアガンベンに寄せて—

寺 道 亮 信

鉛筆を心ゆくまで尖らせて小学童子老人となる

I

大人／子どもの境界線を攪乱すると目される「語る子ども」という形象は、インファンスの鏡像である。

II

ポストモダンの思想が教育学にも持ち込まれた頃、森田伸子は子どもと大人の区分をめぐってインファンスの概念に着目し、中世では生前と死後という魂の世界と接続した二つの時期である幼児、老年、そしてその狭間に位置し現実世界を生きる若者という区別があったのみであると述べている¹⁾。ここでの幼児とは、文字通りまだ言葉を話せないという意味でのインファンス (in-fans) という存在である。それが近代に入ると、書き言葉の習得という課題に応じて〈子ども〉／〈大人〉という区別ができあがった。すなわち、話すことができない幼児、話すことはできるが読み書きができない〈子ども〉、読み書きができる〈大人〉という三区分である。実際のところは、読み書きができれば即座に大人になるわけではない。契約書などの実用的な文書を読む能力の習得が学校教育に要請される現状は、読み書きの能力と大人であることの一致を目指し、読み書きのできる子どもという余地を消滅させる（ギフテッド教育も同じ文脈に位置づけられよう）。小林夏美が『「語る子ども」としてのヤングアダルト』で提起する「語る子ども」(として生き延びる)とは、言語運用能力の習得と大人になることの間隙を縫い、裂開を試みるものである。

では、「語る子ども」はどのように誕生するのか。同書では「語る子ども」について様々な説明がなされており、それ自体が「語る子ども」を語ることの

困難さを表すと同時に、それが困難であるからこそ語ることが可能であるという逆説も露呈している。小林が大きく依拠する竹村和子のスピヴァク読解において、「語る (speak)」ことと「物が言える (talk)」ことはまったく同じではない²⁾。そもそも日本語においても、口から言葉を発するという行為に絞っても様々な動詞で表現することが可能であり、言う、喋る、話す、語るなどの定義づけは容易ではない(にもかかわらず、使い分けることはできる)。そのうえで著者は「語る」という動詞を選択し、「語る子ども」を「大人になる」ことなく語る力を得ることであると述べる³⁾。ここで想定されている「語る力」とは、単なる読み書きの能力以上のものであるだろう。それと同時に、(読み書きができる)大人になることを拒絶する。このような語る子どもの倒錯は、フィクショナル、発達論的な直線の時間に罅を入れ、世界を歪ませる。その生のあり様を、小林は「語る子どもとして生き延びる」と言い当てている。その可能性は、「責任＝応答可能性」に基づく「私」の立ち上げによって開かれる⁴⁾。

責任を意味する responsibility という語を、文字通りに応答－可能性 (respons-ibility) と解するうえで重要なのは、可能性とは「することができる」だけでなく、「しないこともできる」のでなければならないという点である。あえて「語る大人」という対立項を導入すれば、語る大人は語ることしかできない(語らない、応答しないことができない)責任主体であるのに対して、「語る子ども」とは語ることも、語らないこともできる存在であると言えよう。これはジョルジョ・アガンベンに唆されてのアイデアだが、すると「語る子ども」は年齢や読み書きの能力で区分される〈子ども〉だけでなく、〈大人〉にもなる資格が賦与されている。「語ることができる」という潜勢力を経験するとき、私たち〈大人〉

は「語らないこともできる」インファンスになる。インファンスとは、「語る子ども」の鏡像に他ならない。

Ⅲ

坂部恵は、ともに「起承転結をもったひとまとまりの発語行為ないし発話行為」である〈はなす〉と〈かたる〉の間には、明確なレベルの差異があると考える。〈はなす〉が〈離す〉あるいは〈端－成す〉に通じ、原初的な分節ないし差異の設定に関わるのに対し、〈かたる〉は〈形－る〉〈かたどる〉行為として、いったん分節化ないし差異化されたものを〈形〉〈イマゴ〉に向けて取り集め、統合する。〈かたる〉は高度の反省的屈折を孕み、統合の度合いがより高い⁵⁾。かく述べる坂部は〈ものがたり〉、ポイエーシス論へと筆を進めるが、語るという行為は何も人間だけに許された特権ではないだろう。私たちは物を語るが、そして語られたものがまさしく物語となるが——、物もまた語るのである。ある事物はさる事情を物語っている。そのことを認めたとき、私たちは「物語る」という日本語を、事物を主語として用いることができる。

Ⅳ

『語る子ども』としてのヤングアダルト』の第一章では、本田和子の著作を例に「子どもを語る大人」の位置が問題にされた。その問題は著作を通して主題的に取り組まれることはなく、分析対象とする各小説内で大人と子どもとの「翻訳のパフォーティヴィティ」が担保されることを根拠に解消されているように見える。しかしあくまでこれらの小説が「大人」によって書かれ、「子ども」が読むことが想定されている以上、「子ども」が読むという経験について考慮しないわけにはいかない。

作者としての大人と読者としての子どもの関係に示唆を与えるのが、古代ローマにおける法的能力を持たない年少者とその後ろ盾になる後見人との関係である。その後見人はアウクトルと呼ばれる。西洋諸語において「作者」を意味する語 (author) の由来となった言葉である。アガンベンがこの事例を持ち出すのは、ホロコーストの犠牲者とその証言者の関係における証言のパラドックスを巡ってであ

る。証言の大問題とは、懸命に語っているにもかかわらず／そうであるがゆえ、信じてもらえないということである。そこでは主体において言葉と知が分裂している。あるいは、言葉と知の隙間に主体が取り残されている。語れば語るほど本当のことはわからないような気がしてくるし、わかればわかるほど本当のことは語れないような気がしてくる、というのは私たちの経験^{リアル}の実情である。そもそも私たちが話すことができるのは、この分裂があるからであり、したがって「おそらくあらゆる話されたもの、書かれたものは、証言として生まれるのではないだろうか⁶⁾」。もしそうでなければ、私たちの言葉はすべて (ビッグ) データと化す。

後見人と無能力者、創造者とその質料と同様に、生き残って証言する者と回教徒は分離不可能であり、両者の差異をともなった統合のみが証言を構成するのである。⁷⁾

一方はもはや語れない、他方はいまだ知らない証言不可能な二人が出会うことで、証言は構成される。すでに語るができない回教徒に言葉を吹き込むのは、その経験を本当には知らないアウクトル＝作者である。「いかなる作者もつねに共作者である⁸⁾」。アガンベンは第一章で、幼い子どもでもあるフルビネクと、彼が実在しない単語を発し続けていたことを著述するブリーモ・レーヴィとの出会いに言及している。本作で「幼児という特異な存在」への言及が数度行われるのは偶然ではない。『アウシュヴィッツの残りのもの』における知の主体と語る主体の分裂という問題系は、その分裂こそが経験と歴史を生み出すことを幼年期＝揺籃期に託して述べた『インファンティアと歴史』を継承している。

V

赤子は誕生したそばから産着を着せられる。大人＝社会から隔絶されたインファンティアという時期は実のところ存在しない。あるいは小林康夫がフランソワ・リオタールに寄せて書いているように、「コドモの共同体への誕生——その名の登録——は、そのまま共同体によるコドモ殺しを含意しているのだ⁹⁾」。リオタールやアガンベンがインファンスの名のもとに考えるのは存在論的インファンスであ

る。しかしアガンベンは、人間は先天的に話すことはできず、成長の過程で言語を習得しなければならないという発達論的事実をあくまで強調する。それは裏を返せば、大人は決して「話すことを学ぶことができない。はじめて言語活動に到達したのは子どもたち（bambini）であって、大人たちではない¹⁰⁾」。

VI

柄谷行人は『日本近代文学の起源』（1980年）でこう書いている。小川未明の児童文学に対する「本来の子ども」「真の子ども」の視点で書かれていないという月並みの批判は、真の子どもなるものの起源を覆い隠すに過ぎない。確かに未明に「真の子ども」という視点はない。児童文学への専念を決めてからの彼は「現実の子ども」と直面せざるを得ず、大人が説教する対象として子どもを描いた。しかし批判者が言う真の子どもなるものは、現実の子ども、正確には大人から見た子どものイメージに対する残余として、否定性として発生するものであって、本来的に存在しているものではない。したがって彼らには、「本質的に「起源」というものに関する考察が欠けている¹¹⁾」。

かくポストモダンに典型的な柄谷の手つきは、西洋哲学を支配してきた音声中心主義、すなわち文字に対する音声の優位を批判するジャック・デリダと同型である。アガンベンはデリダの仕事の評価しつつも、結局は形而上学の根源のぶり返しにすぎないと喝破する。解釈の無限の繰り延べ、言葉の中への声の宙吊り、終わらなき良心の葛藤に断固として抗い、絶対的な沈黙の経験を対置する。——沈黙とは人間が口ごもることではない。言葉自体が沈黙することである。

VII

アルケー（archē）への問いは、アナーキー（anarchy）の問いへと転回されなければならない。起源など存在しないということ、まさしくそのことを根拠として、誓いや命令といったパフォーマティヴな人間の言語活動の効力は保証されている。「暴力の根拠は根拠の暴力である¹²⁾」。アナーキーとはなんでもありバーリ・トゥードではない。アガンベンにおけるア

ナーキズムとは、アルケーの非存在を暴力の根拠とすることではない。起源を特定するのでも、起源など存在しないと剔抉するのでもなく、クロノスの傍らで戯れること。過去と未来がいちどきに迫り出す舞台袖における、身も心も緊張しきったメシア的時間としての今、クロノロジーの伏流が噴き出す泉＝インク壺（fountain）としてのパラダイムを発見すること。それが彼の哲学的考古学であり、書くことの冒険である。

VIII

人類をインファンスのからだへと立ち返らせるこの真正な呼び戻しは、思考——すなわち政治と呼ばれている。¹³⁾

近年の森田伸子は、お茶の水女子大学附属小学校での哲学対話の実践を観察し、自身も思考に参加することで、自らの〈てつがく〉に関する構想に変化があったことを記している¹⁴⁾。かつて誰にも認め（見留め）られない「一人でする哲学」に哲学への萌芽／からの退路を予感していた森田はしかし、「一人でする哲学」と「二人でする哲学」が驚くほど近接しており、学校で「みんなでする「てつがく」」はそれらと根本的に異なることを発見したのだった。

ハンナ・アレントにおける思考が〈一人の中の二人 two-in-one〉で営まれるものなら、インファンスとしての子どもの思考とは、〈二人の中の一人 one-in-two〉である。子どもは決して一人で思考することはできない。逆に言えば、子どもは問いかけられさえすれば、思考することができる。というより、そうすることによってはじめて大人は、子どもの「思考することができる」という潜勢力を見て取ることができる。これは大人の事情である……「子供は三つぐらいになると、言語の働きにおいて完成します。という事は、この世の中が、根本的には、みんなわかっちゃっているということなんです。[……] 日本語の構造に関する生きた知識は、三歳の子供において完成している、と言うのは、外から、これに、何か付け加える事は出来ないという意味だ。出来るのは、これを育て上げる事だけだ。これが教育の変らぬ原理だな」¹⁵⁾。

哲学対話の輪では、一人では語るこのできない

二人同士が集団の中でそのつど邂逅することで、特定の主体に帰されない行為能力（agency）が生起する（＝場を持つ）のだと考えられよう。そもそもジュディス・パトラーが独自の意味合いで用いる agency とは、第一に「代理店」を意味する言葉である。同様に、関西弁に特有な（のかどうか定かではない）二人称として使われる「自分」とは、証言の場としての主体の生起を織り込んでいる。

K

日本語における「先生」という言葉は、他言語に翻訳の利かない特異な存在を指し示す語ではないだろうか。実際、海外で教師を指す言葉として「センセイ」が輸入されているという話も聞いたことがある。文字通りに読めば、「先に生まれた」存在（辞書でも第一の意味として掲載されている）。同時に、「先を生きる」存在と読むこともできる。アガンベンがアウクトルのコアの概念として「二つの主体のあいだの関係」を引き出したように、クロノジカルな意味で先に生まれたか否かに関係なく、一方が他方の先生＝アウクトルになることが可能なのである。先に生まれた存在としての先生、もしくはその先を生きる存在としての先生。あるいは、「先」という言葉自体が時間的な「前」と「後」の両方を指すことができるように、「先を生きる」存在としての先生とだけ言えば十分かもしれない。

X

言い得ないものを死ぬ物狂いで言おうとする否定性の思考ではなく、言い得ないものをそのまま黙らせておくこと。アガンベン曰く思考とは、フォネーとロゴス、音と意味とが接触する瞬間である。ここでの接触とは両者が接する「点」ではなく、表象の不在によってのみ両者が結合し、あるいはむしろ切り離される「瞬間」である¹⁶⁾。音声入力や自動音声読み上げの機能が盛んに使われる現在、人間の声とは改めて何であるのか。音と声との〈切り結び〉としての音声、あるいは^{こわね}声音。

XI

〈私〉とは、音も声も文字もない黒々とした思考

の泉である。私は、底知れぬ泉にペンを浸してくれる他者を待望している。

註

- 1) 森田伸子「『子ども』から『インファンス infans』へ——変貌するまなざし」、井上俊ほか編『岩波講座現代社会学第十二巻 こどもと教育の社会学』岩波書店、1996年、157-173頁。
- 2) 小林夏美『「語る子ども」としてのヤングアダルト』風間書房、2023年、41頁。
- 3) 同、1頁。
- 4) 同、71頁。
- 5) 坂部恵『坂部恵集 4』岩波書店、2007年、179-182頁。
- 6) Giorgio Agamben, *Quel che resta di Auschwitz: L'archivio e il testimone*, Torino: Bollati Boringhieri, 1998, p.35. (= ジョルジョ・アガンベン『アウシュヴィッツの残りのもの——アルシーヴと証人』上村忠男・廣石正和訳、月曜社、2002年、49頁。)
- 7) Ibid, p.140. (同、203頁。)
- 8) Ibid. (同上。)
- 9) 小林康夫「インファンスの光学——倫理と美学のあいだで」、ジャン＝フランソワ・リオタール『インファンス読解』小林康夫・竹森佳史・根本美佐子・高木繁光・竹内孝宏訳、未来社、1995年、227頁。
- 10) Giorgio Agamben, *Idea della prosa*, Macerata: quodlibet, 2002, p.87. (= ジョルジョ・アガンベン『散文のアイデア』高桑和巳訳、月曜社、2022年、125頁。)
- 11) 柄谷行人『日本近代文学の起源』講談社文芸文庫、1988年、157頁。
- 12) Giorgio Agamben, *Il linguaggio e la morte: un seminario sul luogo della negatività*, Torino: Einaudi, pp.132-133. (= ジョルジョ・アガンベン『言葉と死——否定性の場所にかんするゼミナール』上村忠男訳、筑摩書房、2009年、245頁。)
- 13) Giorgio Agamben, *Idea della prosa*, p.88. (= ジョルジョ・アガンベン『散文のアイデア』、127頁。)
- 14) 森田伸子『哲学から〈てつがく〉へ！——対話する子どもたちとともに』勁草書房、2021年、181-203頁。
- 15) 小林秀雄・江藤淳『全対話』中公文庫、2019年、198-199頁。
- 16) Giorgio Agamben, *Che cos'è la filosofia?*, Macerata: Quodlibet, 2016, pp.43-44. (= ジョルジョ・アガンベン『哲学とはなにか』上村忠男訳、みすず書房、2017年、46頁。)